| ２　事業の概要と成果 | |
|---|---|
| （１） プロジェクト目標の達成度<br>（今期事業達成目標） | 活動対象地における地域住民による OVC へのケアサポート体制強化と青少年のリーダーシップ育成<br>（最終年）指標：子どもケアセンターとコミュニティ関係者の協力による地域内の OVC ケアサポート体制が定着している。<br>（達成度）75%<br>OVC が抱える課題に対して、ケアボランティアにより、あるいはコミュニティ関係者からの相談、情報提供によって発見され、対応した事例が約 70 件確認されている。また、ケアボランティアや青少年らによる活動プログラムの充実や菜園づくりを基盤とした安定した給食の提供により、子どもケアセンターの魅力が高まり、センターは OVC が継続的に通う場所となっている。こうしたことから、地域内の OVC ケアサポート体制は定着しつつあると考えられ、この点において上位目標「リンポポ州ベンベ郡チュラメラ地区において子ども・青少年を取り巻く社会環境が改善される」の実現に貢献しているといえる。<br>引き続き各成果の維持、拡大に取り組むとともに、事業終了後の持続発展性を確保するべく、地域関係者との協力体制をさらに深め、ケアボランティアや青少年が研修などを通じて得た学びを地域内、世代間で広めていくための体制づくりが求められている。<br>子どもケアセンターが OVC に提供するケアの質の向上と青少年らの態度、行動変容が確認されるようになる。 |
| （２）活動内容 | １．OVC に対するケアの質の改善とコミュニティ内のケアサポート体制の強化<br><br>**1-1. 子どもケアセンターにおけるケアの質向上／ケアボランティアの育成（研修）**<br>*⇒計画通りに実施した。*<br>・5 月 10 日～12 日、子どもの人権研修（3 日間）を実施し、ケアボランティア 8 名が参加した。研修では、基本的な人権や子どもの権利について学ぶだけではなく、アパルトヘイトを経験した国として差別をなくすための国としての取り組み（憲法、7 色の国旗、11 の公用語）とその理由、自由の意味などについても学んだ。<br>・10 月 24 日～28 日、救急法研修を実施し、ケアボランティア 7 名が参加した。研修では止血法や骨折の応急処置、心肺蘇生に関する対処法などを学んだ。<br>・1 月 26 日および 27 日、カウンセリングおよびフォローアップ研修を実施し、ケアボランティア 6 名が参加した。研修では、ケアボランティア自身のセルフケアや基礎的なカウンセリングのスキルなどを学んだ（自己資金）。<br>・毎月 1～2 回、子どもケアセンターと申請団体との間でミーティングをもち、日々の課題などを共有（家庭訪問時の保護者とのやりとりや OVC から寄せられたケアボランティアのコミュニケーションのあり方の課題、OVC や保護者から寄せられた課題への対応方法の検討、菜園の状態の確認など）、実際にケアの内容改善に活かした。また、継続的な対応が必要な OVC について、相互に確認を行い、見落としや放置がないように対応した。<br>・既存のトイレの隣に 1 棟 4 室の新しいトイレを建設し、9 月に完成した。<br><br>**1-2. 子どもを持続的に支えるための子どもケアセンター地域づくり**<br>*⇒一部計画通りに実施し、一部実施できず延期した。* |

・9 月 13 日および 14 日、OVC が家庭内、地域内で必要とするサポートについて学ぶカウンセリング研修（Journey of Life 研修）を実施し、保護者 40 名が参加した。
・ケアボランティアが近隣の二つの小学校と一つの高校を訪問し、センターの利用を呼び掛けた。こうした取り組みが奏功し、事業年度の初めは悪天候によって一時的に子どもケアセンターを訪問する OVC の数が減ったものの、その後 OVC らがセンターに戻り始め、また新たに OVC が通い始めた。
・ケアボランティアが家庭訪問を継続して実施した（週に 3 回）。子どもケアセンターにしばらく姿を見せない OVC、新たに通いはじめた OVC、2021 年度からフォローアップが必要な複雑な家庭環境の OVC などを中心に訪問し、状況、課題への対応を続けた。申請団体は週に 1 回のペースでこれに同行し、ケアボランティアとのミーティングを通じて、ケアの内容改善のためのフィードバック、フォローアップを行った。
・ケアボランティアが地域に働きかける際に「子どもケアセンターのケアボランティア」と認知されるよう、ユニフォームを支援した。
・一定の保護者がセンターに定期的に足を運ぶようケアボランティアが働きかけることを優先し、子どもケアセンター・オープンデー、地域住民を対象とした啓発イベントは延期して実施することとした。

**２．子どもケアセンターにおける活動強化**

**2-1. こどもケアセンターにおける年齢別活動の実施**

*⇒計画どおりに実施した。*

・3 月 7 日～11 日、ケアボランティア 8 名を対象に、OVC の年齢に応じた（5～10 歳と 11 歳以上）こどもケアセンターの日常的な活動プログラム改善研修・導入編（全年齢対象）を実施した。本研修は、1 年次末に予定されていたが、研修機関のトレーナーらが新型コロナウィルスに感染、2 年次に延期された（2022 年 2 月 25 日に変更報告済み）。研修は、日本でも実施されている「スカウト」のプログラムを南アの子どもを取り巻く社会状況と課題に合わせてアレンジされた内容で、導入編では、OVC の年齢ごとの研修それぞれの内容と全体像、目的などについて座学で学び、その後、野外でゲームを通じたチームワークやリーダーシップ育成のための手法の基礎を学んだ。
・上記研修を受けて、また「３.」の青少年向け研修の準備として、4 月下旬以降、ケアボランティアと申請団体により、子どもケアセンターで、青少年らを対象とした活動プログラムを開始した。初回は 42 名の子どもたちが参加し、その後も毎週金曜日に開催、毎回 50～60 名程度の青少年らが参加している。
・7 月 4 日～8 日､11 歳以上を対象とした 5 日間の研修(Scout Warrant)を実施した。研修には、ケアボランティア 7 名が参加した。キャンプ形式で実施した研修では、青少年らが遊びながら学べる活動に触れたうえで、それをどのように学びとつなげてプログラム化するのか、構成のコツや考え方なども学んだ。また、本研修に参加した他団体と交流し、互いの経験を共有した。
・7 月 4 日～8 日に実施した研修は、もともと 5～10 歳・11 歳以上対象の活動プログラムに関する研修の同時開催を予定していたが、研修に参加する他団体（本研修はキャンプ形式で、他団体も参加し、交流を兼ねて実施した）の希望により 11 歳以上の青少年に特化した研修を開催することとなった。同時開催形式の場合は、ケアボランティアが年齢別研修に半々に分かれての参加を予定、その後、子どもケアセンターで互いの学びを共有してくことを計画していたが、7 名全員が

| | |
|---|---|
| | 11 歳以上の研修に参加した（結果的には、全員が 10 歳以下と 11 歳以上の両方の研修を受けられることになった）。<br>・10 月 3 日～7 日、10 歳以下の幼少の OVC を対象とした活動プログラムを学ぶための 5 日間の研修を実施し、ケアボランティア 7 名が参加した。屋内や屋外で安全に遊ぶことに配慮した活動プログラムについて学んだ。<br>・上記研修を受けて、翌週から、ケアボランティアと申請団体により、子どもケアセンターで幼少の OVC を対象とした活動プログラム（毎週木曜日開催）を開始した。<br>・8 月下旬以降、研修機関 KTD による子どもケアセンターの訪問とモニタリングが隔月で行われた。<br>・青少年の態度、行動変容等が見られた際のケアボランティアによる記録を促進、サポートした。<br>・他地域の子どもケアセンターとの経験交流は、7 月 4 日～8 日の 11 歳以上を対象とした 5 日間の研修でケアボランティアが参加した他団体と交流を行ったことから、別途機会を設けることは見送った。<br>・2 年次の申請段階では、青少年の対象数を約 120 名としていたが、高校生の年齢にあたる青少年については、2021 年度まで継続していた新型コロナウィルス感染拡大の影響で学校カリキュラムの遅れが続いており、課外学習のために学校に残る子どもが多く、活動プログラムを開始する時間（15 時頃）に子どもケアセンターに来ることが難しい状況が続いている。このため、2 年次は、現在通っている約 60 名の青少年を中心として活動を実施した。<br><br>**３．青少年のエンパワメント（これを通じた意識・行動変容）**<br><br>**3-1. 青少年の育成**<br>*⇒計画どおりに実施した。*<br>・7 月 11 日～15 日の 5 日間、KTD スタッフを講師に迎え、青少年を対象としたリーダーシップ・ライフスキル研修をキャンプ形式で実施した。他団体と合同で開催され、46 名が参加した。現在、最大約 60 名の青少年が日々子どもケアセンターに通っているところ、約 15 名の不参加の主な理由は、体調不良、学校休暇中だったため家庭の事情で参加できなくなったなど。研修では、「スカウト」のルールや野外での調理を通じてのチームワークビルディング、子どもの権利や責任についての学びが盛り込まれたゲーム、男女に分かれての性教育、ライフスキル研修を行った。<br>・本研修は、①5 日間×1 回（約 45 名のリーダー候補対象）、②6 日間×1 回（約 120 名）×1 回開催の計画で、まず①を開催、続いて②を開催して 80 名が合流、全青少年約 120 名が参加する形で実施する予定だったが、上記のとおり、2 年次に継続的に子どもケアセンターに通っている青少年は約 60 名のため、①の中に②の内容も盛り込む形で、全員を対象に一度に開催されることになった。研修機関としては、ムペゴ子どもケアセンターの青少年の数が多いということで、同センター単独で、計画の内容（①②を分けて）での開催を検討していたところ、本来の形に戻す結果となった。<br>・8 月 4 日には、研修の内容や様子を伝えるため保護者会を開催し、フィードバックや意見交換を行った。約 30 名の保護者が参加した。<br><br>**3-2. モニタリングと他団体との交流**<br>*⇒一部計画通りに実施し、一部実施できず延期した。*<br>・研修機関 KTD によるモニタリングについては「２.」に記載のとおり。 |

| | |
|---|---|
| | ・8 月以降、研修不参加／新しく通い始めた青少年も含めた約 60 名の青少年を 10 のグループに分けて、申請団体が主導する形でケアボランティアとともにプログラム内容を検討し、実施した。<br>・3-1. に記載のとおり、研修が他団体との交流の機会となったため、2 年次に別途他団体訪問などの機会は設けなかった。理由は、①申請段階では、1 年次内に何らかの形で「３.」の活動を開始し、青少年らが活動プログラムをある程度経験していることを想定していたが、これが叶わなかったこと、②2022 年度も、2021 年度までの新型コロナウィルス感染拡大による学校閉鎖の影響を受けて、学校休暇期間が本来の時期とずれており、事前の調整が難しいことが想定されたため。3 年次に実施する。<br><br>**４．菜園づくり**<br><br>**4-1.　菜園づくり研修**<br>*⇒一部計画通りに実施し、一部実施できず延期した。*<br>◆子どもケアセンター（ケアボランティア）の菜園<br>・2022 年 1 月から、悪天候が続き、播種や苗を植えては菜園がダメージを受けるということが繰り返され、2 月以降 3 月中旬まで、菜園づくりができない状況が続いた。この状況を受けて、3 月中旬より菜園づくりを再開した。この状況下で、3～4 月に子どもケアセンターの菜園から収穫できない時期が生じ、申請団体が緊急食料支援を行った(自己資金)。こうした経験を踏まえ、2 年次に入ってからは、通常の季節に応じた栽培計画だけではなく、気候変動・異常気象など予測不可能なリスク対策も検討しながらの栽培計画、菜園の維持管理を行った。<br>・ケアボランティアは常時 5～6 種類の野菜や豆類、メイズを栽培する方法を学んだ。気温の低下や長雨などの天候不順により、トマトなど一部野菜の生育が不調な状態が続いた。これに対し、以前は、学校や地域関係者から寄付されたものは使い切るなどしていたが、収穫できない期間に対応できるよう、一部を冷凍して保存しておくなど、年間を通じた給食提供のための収穫物、食料の管理も行った。子どもケアセンターでは週 5 日の給食が提供された。<br>・申請団体は毎週 1 回菜園のモニタリングを行い、上記の対応、内容をケアボランティアらとともに検討し、指導した。<br>・収穫した種子による苗づくりなど、残された課題の解決に注力したため、気候変動や種子の多様性など、農業・菜園づくりを取り巻く環境の変化や政策について学ぶ座学の研修は持ち越して実施することとした。<br><br>◆OVC による菜園づくり<br>・5 月初旬に、青少年 45 名を対象とした研修を開始、畑のデザイン、堆肥づくり、マルチング等の方法を学んだ。子どもケアセンターの敷地内に、青少年らが主体となって管理する菜園（8 畝）を作り、トマト、からし菜、キャベツ、タマネギ、ピーマンの栽培を開始した。6 月初旬には、堆肥（コンポスト）の作り方に関する研修を実施、維持管理方法を伝えた。<br>・その後は、申請団体が毎週 1 回モニタリングを行い、青少年らと菜園での作業をともに行いながら指導を継続した。1 年次に研修を受けた青少年に対してもフォローアップを継続し、観察された課題に応じて必要なアドバイスを行った。<br>・菜園に効率的に散水できるよう、10 月に水タンクの土台を建設、設置した。<br>・悪天候により菜園づくりのできない状況が続き、ケアボランティア |

| | |
|---|---|
| | や青少年は子どもケアセンターの菜園において実践の定着を図っている段階にあることから、ケアボランティアの他団体との経験交流および青少年による自宅での菜園づくりは延期して実施することとした。 |
| （３）達成された成果 | **【今期達成目標】**<br>**ケアボランティアが、地域の関係者と協力し、OVC が抱える課題を発見・確認し、適切に対応できる。**<br>**（成果 1）ケアボランティア 10～11 名が、コミュニティ関係者（保護者・住民・学校など）と協力しながら、子どもケアセンター内外の OVC が抱える課題を新たに確認・発見し、対応している。**<br>**・指標 1：子どもケアセンター内外の OVC に関する課題が、ケアボランティアにより発見され、あるいはコミュニティ関係者からの相談・情報提供により確認され、対応した事例が、年間約 30 件確認される（毎月 2～4 件程度を想定）。**<br>**・指標 2：コミュニティ関係者からの紹介により、新たな OVC が 10～20 名子どもケアセンターに通い始める**<br>**・指標 3：安心してトイレに行けると答えた子どもが全体の 80%になる。**<br><br>*⇒ほぼ達成されたが、一部未達成。*<br><br>・指標 1 について、子どもケアセンター内外の OVC に関する課題が、ケアボランティアにより発見され、あるいはコミュニティ関係者からの相談、情報提供により確認され、対応した事例が 69 件確認された。<br>・「２.」「３.」の活動との相乗効果で、「３.」の研修中に家庭の事情を打ち明ける OVC や、OVC が連れてきた友人が孤児であることが判明する、プログラム活動としてゲームを行うなかで文字が書けない青少年（保護者からのネグレクト）を特定するなど、子どもケアセンター内外の OVC が抱える課題を確認し、対応した。<br>・1 年次の最終月（2022 年 2 月）に実施された HIV/エイズ研修の前には対応できなかったケースで、研修後に（2 年次に入ってから）ケアボランティアらが対応し、状況を改善させている事例なども確認されている（1 名の青少年が HIV 感染、ARV（毎日決められた時間の服薬が必要）を服薬しているが、以前は学校の時間と重なっており、服薬を嫌がり、体調を崩していた。ケアボランティアがクリニックの看護師と相談の上、服薬時間を早朝に変更し、青少年自身に ARV の効能や服薬方法を守ることの大切さを説明した結果、適切な服薬が可能となり体調も戻った、など）。<br>・一方で、「３.」の研修のなかで、自身が抱える悩みや課題を申請団体や研修機関に打ち明けるものの、ケアボランティアには隠している青少年が複数名いることがわかり、ケアボランティアと OVC の信頼関係構築も含めて、まだ取り組むべき課題が残されていることが確認されている。<br>・子どもの人権研修時にはプレ・ポストテストを実施した。プレテストでは、50 点満点のところ、40 点を獲得した 1 名を除く全員が 15～20 点だったところ、ポストテストでは 1 名を除く全員が 40 点以上（うち 1 名を除き全員が 45 点以上）を獲得した。ポストテスト時も 30 点台だった 1 名については、研修が英語で行われるなか、申請団体のスタッフが現地語に翻訳しているが、理解を深めることが難しかった（ポストテストの点数は大幅に向上している）。研修後、他のケアボランティアと申請団体がミーティングの中などで振り返りを行い、情報共有を行った。研修後には、OVC が持っている権利を知り、サポートのために行政などにアプローチしやすくなったなどの声が聞かれた。 |

| | |
|---|---|
| | ・指標 2 について、コミュニティ関係者からの紹介により、新たな OVC が 5 名子どもケアセンターに通い始めた。<br>・指標 3 について、衛生的で安全なトイレが新たに設置されたことにより、ほぼ全ての子どもが助けを必要とすることなくトイレに行けるようになった。<br><br>**【今期事業達成目標】**<br>**ケアボランティアが子どもケアセンターの活動を改善するための知識を得て、それを活用できる。**<br>**（成果 2）：ケアボランティアが、OVC の年齢に応じた活動プログラムを定期的に企画・実施している。**<br>**・指標 1：ケアボランティア 10～11 名が協力しながら、年齢別（10 歳まで、11 歳以上）の活動プログラムを週に 2 回実施している。**<br>**・指標 2：年齢ごと（10 歳まで、11 歳以上）に、5～6 種類の活動プログラムを実施できる。**<br>**・指標 3：2 年次から新しく通い始めた OVC20～30 名（成果 1・指標 3 の 10～20 名＋成果 3－2・指標 2 の 10～11 名）を含む約 150 名の OVC が継続的に子どもケアセンターに通っている（1 年次に子どもケアセンターへの登録数が事業前の約 150→約 300 名に増えたが、COVID-19 の影響で学校に時間を取られる子どもも多く、1 年次に日々活発に通っている OVC が約 120 名。このため、2 年次は、この 120 名に加えて、増加した 20～30 名を含む 150 名の継続的な参加を目指す）**<br><br>*⇒ほぼ達成されたが、一部未達成。*<br><br>・指標 1 および 2 について、ケアボランティアは OVC の年齢別ごとに、活動プログラムを週に 2 回実施している。ただし、ケアボランティアだけで企画、構成している活動プログラムは一部にとどまっている。<br>・指標 3 について、約 200 名の OVC が継続的に子どもケアセンターに通っている。<br><br>**【今期事業達成目標】**<br>**青少年がリーダーシップ／ライフスキル研修を通じて知識を得て、それを活用し始める。また、青少年に態度・行動変容が見られる。**<br>**（成果 3－1）：青少年が子どもケアセンターにおける活動を定期的に企画・実施している。**<br>**・指標 1：約 120 名の青少年らが、10 グループに分かれ、各グループが 1 つの活動プログラムを企画している。これらが順番にあるいは組み合わされて、週に 1 回実施されている。**<br><br>*⇒一部達成。*<br><br>・指標 1 について、青少年自身で活動プログラムを企画、構成するまでには達していないが、青少年らはグループに分かれ（現在は 8 グループ）、ケアボランティアのサポートを受けながら、活動プログラムを週に 1 回実施している。<br>・青少年ら自身による積極的な取り組みも確認されている。研修後には一部の青少年らが、合同で研修に参加をした他団体の青少年らと WhatsApp グループを作り、情報交換しながら勉強を教え合い、これをグループに参加していない他の青少年と共有をして勉強をサポートし合っている。<br><br>**（成果 3－2）：青少年の間で態度・行動変容の事例が確認される。** |

| | |
|---|---|
| | **・指標 1：約 15 名の青少年の間で態度・行動変容の事例が確認される。**<br>**・指標 2：青少年から情報を得て約 10～11 名の OVC が新たに子どもケアセンターに通い始める。**<br><br>*⇒ほぼ達成されたが、一部未達成。*<br><br>・指標 1 について、15 名の青少年の間で態度、行動変容の事例が確認された。活動プログラムを導入するようになって以来、それまでケアボランティアに対して反抗的だったが素直になる、学校を休みがちだったが日々通うようになる、喧嘩ばかりしていたがそれが止むなどの事例が確認されている。<br>・8 月 4 日に行われた保護者会（7 月の青少年に対する研修のフィードバック）では、研修から帰ってきた子供たちが、家の手伝いを率先して行うようになった、服装に気を付けるようになった、寝坊と学校の遅刻がなくなった、宿題や読書をするようになったなど、行動変容について活発なコメントが出された。<br>・指標 2 について、青少年から情報を得て 3 名の OVC が新たに子どもケアセンターに通い始めた。<br><br>**【今期事業達成目標】**<br>**子どもケアセンター敷地内の菜園の収穫物を使って年間を通じて子どもケアセンターの給食を提供できる。また青少年が年間を通じて菜園づくりを行える。**<br>**（成果 4－1）：子どもケアセンターの菜園において、年間を通じて、計画に基づいて複数種類の野菜が栽培され、収穫物給食が提供されている。**<br>**・指標 1：ケアボランティア 10～11 名が子どもケアセンターの敷地で計画に基づいて、常時 5～6 種の野菜を、年間を通じて栽培している。**<br>**・指標 2：年間を通じて、子どもケアセンターの週 5 日の稼働日のうち最低 4 日間は給食が提供され、野菜食材は全て子どもケアセンターの菜園の収穫物から提供される。**<br><br>*⇒ほぼ達成されたが、一部未達成。*<br><br>・指標 1 について、ケアボランティアが子どもケアセンターの菜園においてメイズ、タマネギ、キャベツ、からし菜、ピーマン、ネギ、トマト、豆、ホウレンソウなどの野菜を継続的に栽培した。<br>・指標 2 について、年間を通じて、子どもケアセンターの週 5 日の稼働日のうち 5 日間の給食が提供された。一方、子どもケアセンターの菜園の収穫物は給食の野菜食材全体の約 4 割にとどまり、地域の学校や企業からの寄付、冷凍保存している分の野菜（前期収穫や寄付でもらったもの）などを組み合わせて給食を提供した。<br><br>**（成果 4－2）：研修を受けた青少年が自宅あるいは子どもケアセンターでの菜園づくりを年間を通じて実践する。**<br>**・指標 1：研修を受けた青少年約 120 名（2 年次約 20～30 名（成果 1 指標 2、成果 3－2 指標 2 参照））のうち 80%が菜園づくりを実践、年間を通じて何かを栽培している。**<br><br>*⇒一部達成。* |

| | |
|---|---|
| | ・指標1について、放課後の課外授業の影響を受けずに定期的に子どもケアセンターに通える青少年が約60名いるなかで、全員が菜園づくり研修に参加し、水やりや草取り、コンポストの世話など、継続的に菜園づくりに参加した。<br><br>上述の成果は、SDGsのうち特に、<br>目標1. あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる（1.1、1.5）<br>目標 2. 飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する（2.1、2.5）<br>目標3. あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する（3.3、3.5）<br>目標4．すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する（4.5、4.7、4.a）<br>目標10. 各国内及び各国間の不平等を是正する（10.2）<br>目標16. 持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する（16.2、16.7）<br>に直接的、間接的に寄与する活動、成果であると言える。 |
| （4）持続発展性 | プロジェクト目標達成に向けた各成果および各活動の3年次における見通しは以下の通りである。<br>・成果１・活動１：ケアボランティアによるケアの改善については順調に変化や成果が見られていることから、引き続き研修を通じてこれを促進していく。また、今後は地域内で協力しながらOVCを特定し、サポートを提供していけるよう、保護者会や学校訪問などの機会を通じて保護者や学校、その他住民、ソーシャルワーカーなどを含めた地域関係者との信頼関係、協力体制を築いていくことに注力する。<br>・成果２・活動２：ケアボランティアは活動プログラムを実施できるようになっているが、自分たちだけで遊び（ゲームなどの活動）と学びをつなげて「プログラム」として企画、構成することはまだ難しいため、これが可能となるよう研修を提供し、モニタリングとフォローアップに注力していく。また、ケアボランティアが新しく通い始めた青少年や幼少のOVCに活動プログラムを伝え、巻き込むことをサポートしていく。<br>・成果３・活動３：青少年の間の態度、行動変容は多く確認されており、研修と活動プログラム導入の効果が見られているため、これらを継続する。また、青少年自らが積極的にさまざまな活動や取り組みを行うことを、ケアボランティアと協力しながら後押しし、青少年から次の世代の青少年、新しく通い始めた青少年らに学んだことを伝えることで、学びが持続的に受け継がれていくような体制づくりに注力していく。<br>・成果４・活動４：ケアボランティアによる菜園づくりについては、異常気象等のリスク軽減を考慮しながら、継続して収穫するための計画と栽培をケアボランティアだけでできるよう､研修等を行っていく。また、事業終了後もケアボランティアが青少年や保護者ら、関心を示した近隣の住民に技術を伝えていけるよう「教える」ためのスキル、ノウハウを伝えていく。青少年らによる菜園づくりについては、子どもケアセンターの菜園での実践を継続しつつ、家庭菜園づくりを開始し、個々の実践の定着を図っていく。 |